

I 経営の重点に関わること

評価段階 (A:よくできている B:概ねできている、C:あまりできていない、D:できていない)

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員会から	改善策(来年度の具体的な取組目標等)
自分が好き 友だちが好き	自分で決めて やってみようとする	自分でやりたい遊びを見つけ、 夢中になって遊ぶ	やりたいあそびを自分で見つけ「今日はこれをやろう」と遊びに向かう。今まで経験した事を思い出し別の遊びの共通点同士をつなげたり、必要なものを自分で選び、持ってきたりしながら発展する姿も見られる	A	A	子どもたちの様子から人見知りの子もいると思うが、明るい子が多いイメージ。寒いのも忘れて張った水をじっくり見たり、ままごとに利用したする姿があった。評議員に対して自分から挨拶をしたり、名前は何歳かと聞いてくれた。また、クレヨンを持った時に1歳児が「ありがと」と言ってくれ、とても気持ちよかった	子どもが、自分のやっていることを肯定的に捉えてもらうことで「やってみよう」という姿につながった。更に遊びを充実、発展させるためには友達に自分の遊びの楽しさや思いを伝えたり、友達の意見を聞いたりなどのつながりが必要になる
		さまざまな遊びや経験を通して自信が つき「やってみよう」とする意欲がも てる	保育者が子どもの姿を肯定的に受け止めている為、「やってみよう」「次はこうしてみよう」と前向きな子どもの表情が多くみられるようになった。今まで楽しんでいた遊び同士を繋げて遊びが広がる姿も見られる	A	A	2歳児が自分が嫌だったことを相手に伝えている姿があった。エスカレーターで手が出さなくなったが思い切り叩くのではなく当たらないようにしていた。また担任は様子把握しながら見守り、傍につき絶妙な距離感にいた。2歳児でも自分の思いを伝えようとする姿があることや先生方の対応も素晴らしいと感じた	可動遊具を使って自分で考えて遊べるようになってきているので、もっと「やってみよう」という気持ちになるために、各学年の遊びや発達に必要な教材や素材を準備していく
		友だちと関わって一緒に遊ぶ中で、相 手の思いにも気づく	保育者が子どもの思いを伝えられるように励ましたり、待ったり、気持ちを汲み代弁する中で相手に伝えられるようになった。またそれが聞こえる姿にも繋がった。まだうまく伝わらない経験からか諦めてしまったり意思を伝えたいという気持ちに気付く力が付いてきている	B	A		物を大切にしている意識が弱いと感じるため、物を大切にすることを保育者が片付けをしやすい環境を作る

II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員会から	改善策(来年度の具体的な取組目標等)	
1 こども園における 教育及び保育	(1)0歳から小学校 就学前までの一貫 した教育及び保育	発達の道筋を保育者が理解したうえで、 子どもの興味関心やその子の発達に 合った対応や環境が工夫されている、	各学年の子どもの遊びの“今”の状態を遊び会議で伝え、職員同士共有していた。また、自由度のある教具や遊具は用意されているが、それぞれの学年の発達に合った環境はさらに工夫が必要であり、保育を深く考えるほどまだ足りないのではと感じる	B	A	子どもたちがダイナミックで自由に遊べる場所が少なく理解している中、園では色々なことができている。部屋では手作りの物があり、工夫されていると感じた	ほかの学年にも目を向けて園全体としての遊びや発達を理解し、週一回の遊び会議等で共有していく 遊びの発展性を考え、園内研修で教材研究や遊び研究をおこなっていく	
		(2)一日の生活の連 続性及びリズムの 多様性への配慮	ひとり一人の育ちや、生活リズムを考 慮し、その子の気持ちに寄り添った援 助を行うよう努めている	個人差があることを踏まえて子どものペースで生活できるように個の把握丁寧に行ってきた。また保護者との連携を取るうちそれぞれが努力している。保護者が登園時間の意識が低かったりボードを見ようとしないうなど、どのような声掛けが必要か考える必要がある	A	A	ボードを見せさせてもらおうと先生方が毎日忙しいのにこれほど細かい物を毎日作成していることを考えると感心する。写真を通して保育を伝えられるのも素晴らしいと思う	個々に合わせて生活リズムを作ることも大切だが、保護者にも子どもにとって必要な生活リズムがあることを伝えていく
		(3)環境を通して行 う教育及び保育	子ども達が自分で考えたり、試行錯誤 したり、やってみたい事が繰り返し楽 しめるような、静と動を意識した環境 づくりができている	各学年の発達やねらいを意識した環境を作る中で、全クラスが園庭で遊べるための工夫をしてきた。遊びの時間を保証することで、十分に試行錯誤したり繰り返し楽しめることができた。しかし、静と動を意識した遊び環境という部分では引き続き来年度の課題である	B	B	先生方が、よりよい環境を整えようとしていることは理解しているが、静と動がきちり分かれていることではなく、混在していることもこの園の魅力の一つではないか。また、事務室でほっと一息しながら遊べることも魅力である 保護者としては、園だけでなくどのような訓練が行われているか理解している。	子どもたちのそれぞれの遊びが混在せず、集中したり思い切り体を動かしたりできるための場の保証ができるための環境設定をしていく
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	さまざまな場面を想定した避難訓練が 行われる中、職員同士が連携を取りな がら、自ら考え避難行動がとれるよう になる	様々なシチュエーションを想定した訓練を年間予定を基に行っている。反省から出てきた課題も出しているがその課題が次に生かされないこともあり、個々が意識を高めていくことが必要である。また職員が備蓄の確認やトイレの設営方法を学び対応できるようにした	B	A		防災に関しては、今まで出された課題を踏まえて年間計画を立て、実行していく	
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	健康的な生活に関心を持ち、手洗い・ うがいや、身支度などの生活習慣が身 につくよう、発達に合わせた指導がで きている	手洗い・うがいだけでなく身辺の自立も同様で、丁寧にできる子とそうでない子との差がある。保育者側もなぜそうなるのかを考え、個別やクラス内でできないことに対して発達に合わせて身に付けていきたいことを子どもたちが自分でやろうと思えるよう指導をする必要がある	B	A	身辺自立に対しては、家庭の影響も大きい。園だけに任せるのではなく家庭でも意識して行っていくべき。園と家庭が融合した時に身につくものであると考える	なぜその指導が必要なのか、生活習慣に関してはおおよそ何歳児で達成に向かったらよいかを職員で共有して、各自が意識していく	
4 特別支援教育・ 保育	(1)支援体制づくり の推進	誰もが区別や差別なく、仲間として共 に育っていけるような園の雰囲気作り と、職員の意識改革ができている	特別支援児とのかかわりの中で、子どもたちが仲間として遊ぶ姿や支えあっていると感じる姿が見られる。特別支援研修を支援担当だけでなくその他の職員が受けることで、支援の方法や考え方について理解が深まり保育に生かされた	A	A	分掌に対しては外から見たら分からないことだが、園の雰囲気は良いと感じる	支援担当者会議だけでなく、今年度のように職員が全員参加できるような研修を行うことで、特別支援の考え方や支援の具体的な方法を身に付けさらに理解が深まるようにする	
5 組織運営	(1)組織体制の充実	担当者が分掌に責任を持って取り組む と共に、職員が協力し合える体制がで きている	分掌のリーダーとしての仕事は責任をもって行っている。細かく担当ができたことでわかりやすくなったが、リーダーに任せきりになるのではなく各自が意識を高く持っていくべき	B	B		分掌ごとの取り組みや発信を月1回会議などで伝え、全員で進捗状況の確認を行う。分掌の担当者会議も分掌計画に織り込んでいく	
6 研 修	(1)研修体制の充実	職員が子ども達に肯定的に関わり、子 どもも理解を深めることができるよう な園内研修に取り組む	公開保育の事後研修で出された課題を園内研修でも取り上げ話し合い子どもも理解を深めた。また研修に様々な職種の職員が参加することで職員の学びの時間に繋がった。今後、PDCAを意識した会の進め方や研修だよりの発行を行い、全職員にわかりやすくする必要はある	A	A	保護者が登園時間の意識が低いことに対しては、子どもに合わせて遅くなっている場合と保護者の都合で子どもの登園が遅くなっている場合がある。なぜ、遊びの時間(教育時間)が必要なかを伝え、理解してもらい必要があるのではないかと	全職員が研修に参加することができたため、引き続き行っていく。また今どんな研修を行っていったん話し合いがされているのかを確認できるよう研修だよりをより分かりやすく作成していく	
7 教育・保育環境 整備	(1)教育・保育環境 の充実	ヒヤリハットや保育環境、遊びだしの 環境などの検討を行い、安心安全な環 境づくりに努めている	ヒヤリハットへの意識は高まっているが、差はまだある。リスクとハザードへの意識は研修を通して身につけようとしているが、怪我をさせてしまう怖さが強くなっているのではないかと。ハザードの部分強化していきたい	B	A	アブローチカリキュラム作成と保育説明や学校探検など、今年度スタートさせたことに対して評価ができる。子どもたちのために小学校との段差をなくしてあげるよう、これからも行ってほしい	事故防止に関しては、ヒヤリハット記録をより多く提出することで、職員のけがに対する意識を高められるようにしていく	
8 家庭との連携・ 協力	(1)家庭教育への支 援機能の充実	保護者に読んでもらえるようなお便り や日々のボードの工夫をして、保護者 により分かりやすい発信ができている	日々のボードでは、写真を使いわかりやすい遊びの説明をしている。職員も他クラスのものを見て工夫をしている。ただ、毎日見ない保護者が多いのが現状のため、読んでもらうための工夫が必要である	A	B	コロナ禍の中、地域の方と一緒にやる相模大会やしめ縄作りなどの行事を積極的に取り組むことができる。地域の方に愛される園でありたいですね	保護者に対して、教育的な部分が伝えられるようにドキュメンテーションを使って説明していく。特に伝えたいことがあった日は、目立つようにしたり、言葉で説明をするなど毎日見る習慣がつくようにしていく	
9 近隣の学校との 連携	(1)近隣の園との連 携の推進	近隣の小学校との連携を図りながらア ブローチカリキュラムを作成し、交流 を深める	アブローチカリキュラムを作成し、小学校へ保育の説明を行った。また、学校探検に行き実際に体験したり見ること、身近に感じられるようになった。職員同士も交流を始めたことで、顔を合わせて話ができて、壁が低くなったと感じた	B	B		今年度、始動できた部分を継続しながら職員研修などで幼小の連携が図れるように学校に働きかけていく	
10 地域との連携	(1)信頼される園づ くりの推進	散歩に出かけ地域の方々とあひさつを 交わしたり、相模教室などに参加した りする中で、保育者や子ども達が地域 に親しみを持てるようになっている	コロナ禍ではあるが、地域の方にご協力いただき自園の伝統行事を開催できた。また、散歩に出かけ近所の方と顔を合わせ、挨拶を交わす中で園児に話しかけてくださる方も多く、子どもたちも笑顔で接し近所の方を身近に感じている	A	A		地域の方々のご協力を仰ぎ、自園の伝統行事を引き続き行い地域の方に感謝をしていく。 園児が近所を身近に感じ、道や公園、近所の方々に親しみを持てるように散歩に出かける回数を増やす	